

家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する調査（2）

Survey on Necessary Awareness and Practice of Home Economics Learning Content（2）

岩田奈々・夫馬佳代子・

nana iwata・kayoko fuma

要旨

本報告は、小中学校で習得した家庭科に関する知識や技術が、実生活でどの程度実践しているかの実態と、必要と感じているかについての意識に関する調査結果をもとに、特に衣生活の実態に着目してまとめたものである。全体調査の結果から、衣生活に関しては生活環境の影響や技術の習得実態や必用意識に男女差が著しくみられたため、衣生活における『客観的項目』と『内面的項目』の分析その詳細について分析を試み、若干の知見を得たので報告する。

なお、同様の調査を2004年度から継続的に行っているが、本報告は、2020年度の調査結果の報告である。

キーワード：衣生活・技能・実習体験・家庭科の実践・家庭科の必要意識・意識調査

1. はじめに

家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する調査として2004年から継続的に取り組んでいるが¹⁾、本報は2020年度の結果の中から、特に衣生活の調査結果について分析したものである。

今年度の調査では、衣生活に関する実践や必用意識に男女差や生活経験の差が著しくみられた。そこで、さらに衣生活における『客観的項目』と『内面的項目』に関する具体的な質問内容の詳細について検討し、衣生活の学習内容の活用実態及び必要意識の課題を明らかにしたので報告する。

家庭科は、旧指導要領解説においても「生涯の見通しをもって、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成する」²⁾とされ、生活の創造と生涯にわたり学ぶ教科という特徴が示唆されている。³⁾

こうした家庭科の特徴を考えると、生活の中での家庭科に関する習得内容の実践などの追跡調査は、小中高等学校で習得した内容の定着度を捉える上でも、また家庭の履修内容を見直す上でも必要と考えられる。本報告は、小中学校で習得した家庭科に関する知識や技術が、実生活でどの程度実践しているか、必要と感じているかについての実態と意識に関する継続的調査の今年度の結果をもとに、衣生活の技術など、男女差が実践と意識に見られる実態の背景についても検討を加える。

2. 研究及び分析方法

1) 研究方法

研究方法は、留置法によるアンケート調査を実施した。

2) 調査対象者

調査対象者は大学生160名（教育学部）を対象とした。回答者の属性は、性別は男子56名、女子104名、生活形態は下宿者58名、自宅者102名である。

3) アンケート調査項目

アンケート調査項目は、日常生活の中での実践と必要意識について衣食住の3つの生活場面をもとに、各内容について10項目の質問を設定した。質問項目は、2004年からの推移の分析を目的とする為、2004年の調査時と同様の調査項目を用いる。具体的な調査項目は、表1に示す。

ここで示した客観的視点5項目、内面的視点5項目は、各年代の指導要領にも継続的に記載される内容であり、家庭科の基本的な指導内容と捉えている。

なお、客観的視点の中で具体的な調査項目として示した5項目は、家庭科で習得した〈知識〉や〈技術〉を生活の中で活用するなど客観的視点から捉えられる能力を示し、以下『客観的項目』と示す。一方で、内面的視点5項目は、〈交流〉や〈探索〉、〈創造〉、〈ゆとり・いやし・感覚〉のように、自分の内面に内在する内面的視点から捉えられる力を示し、以下『内面的項目』と示す。

アンケート調査は、1つの質問項目に対し『自分が現在生活の中で「実践している」あるいは「できると思う」レベル』と、『今後生活していく上で、どの程度必要なことだと思うか』の2側面について回答する。

表1 アンケート項目

視点	軸	具体的な視点	分類 10項目
客観的	知識	科学的	①科学的知識
		合理的	②合理的知識
		情報獲得	③情報活用能力
	技術 (技能+知識)	技能を用いた	④技能レベル1
		実践力	⑤技能レベル2
内面的	交流	家族・地域と交流	⑥家族・友人・地域交流
	探索	探索行動	⑦試行錯誤・応用能力
	創造	創意工夫	⑧生活を創る能力
	ゆとり・いやし	ゆとり・いやし	⑨生活の中でのゆとり・癒し
	感覚	人間らしい五感	⑩快適さの追究

衣生活に関する分析は、表1に示す分類10項目について、具体的な家庭科の習得内容を質問項目として設定し、「実践レベル」、「必要意識レベル」項目ごとに分析する。また、アンケートの回答の内訳を、「男女別」、「下宿・自宅別」のように性別や生活形態で比較し、「実践レベル」や「必要意識レベル」に与える影響について質問項目ごとに分析する。

質問に対する回答形式は、「実践レベル」、「必要意識レベル」共に①「よくする (とても必要だと思う)」、②「少しする (少し必要だと思う)」、③「あまりしない (あまり必要だと思わない)」、④全くしない (全く必要だと思わない)」と4段階に分類し、①②を積極的グループ、③④を消極的グループと2つのグループに分類して分析を試みる。

このように家庭科で習得した『客観的項目』と『内面的項目』に関し、「実践レベル」、「必要意識レベル」の2つの側面から実態と意識を比較して検討する。

3. 結果及び考察

(1) 『客観的項目』の分析

『客観的項目』としては表1に示す5項目 (①科学的視点、②合理的視点、③情報獲得能力、④技能レベル1、⑤技能レベル2) を設定している。

衣生活に関する知識に関する質問項目は、資料1に示す①科学的視点、②合理的視点、③情報獲得能力の3項目である。資料1に示す図は、質問項目に関し、性別と生活実態別に「実践レベル」と「必要意識レベル」それぞれに関し、「よくする (とても必要だと思う)」、「少しする (少し必要だと思う)」、「あまりしない (あまり必要だと思わない)」、「全くしない (全く必要だと思わない)」の4段階で回答した割合を示したものである。

1) 科学的知識に関する質問の分析

資料1①【科学的知識】に関する質問「衣服の素材によって、吸水性や通気性などが異なる等、科学的な知識に配慮して取り扱っている」に関する内容は、小学校で布の性質と洗濯の実践について学び、さらに

中学校でも繊維の特性と洗濯の汚れが取れるしくみ等、基礎知識を学ぶ内容である。

この質問項目の実践と必要意識について比較すると、以下の傾向がみられる。

全体的に実践と必要意識を比較すると、必要意識に関しては「とても必要」「少し必要」など積極的に必要と捉えている回答が9割以上であるが、実践に取り組んでいるとする回答は5割程度である。

資料1①の男女別の傾向を見ると、「実践レベル」に関しては女子の方が約10%の差で積極的な回答を示している。一方で、生活形態別に「実践レベル」をみると、下宿者に比べ自宅の方が約5%高くなる。

下宿の4割以上が実践に消極的であり、全体的に「実践レベル」が低いことが分かる。衣服の吸水性や通気性など素材に配慮することが少なく、洗濯表示を見ないまま取り扱っているのではないかと推測できる。「必要意識レベル」では「とても必要」・「少し必要」と積極的な回答がみられるが、「とても必要」の回答では男女差が見られた。

全体的にも「実践レベル」は低い「必要意識レベル」高い傾向がみられることから、必要だと思っ
ても実践できていないことが考えられる。また、男女差が見られ、性別による影響を受けていることが分かる。

2) 合理的知識に関する質問の分析

資料1②【合理的知識】に関する質問「洗濯する時には、洗濯の汚れの落ちと、適切な洗剤量との関係について考え、無駄な洗剤を使わぬよう考慮する」に対する回答の内訳から以下の傾向がみられる。

「実践レベル」図から、全体的に半分の人が洗剤量を気にせず洗濯を行っていることが分かる。【科学的知識】では男女差が生活形態別よりも差異がみられたが、【合理的知識】では男女別は約5%、生活形態別は約15%の差があり、下宿・自宅差の方が差が大きくみられた。自宅者は、家族の衣服を洗濯するため、自分自身が洗濯する機会が少ないことも推測でき、それにより実践に関し消極的なグループが多いとも考えられる。下宿者の40%は、洗濯の量と洗剤量に関し適切な判断をせず、洗剤を入れていることが図からみえてくる。

「必要意識レベル」では、「とても必要」と回答した割合に関し、性差である男女差が25%程みられる。一方、生活形態別である下宿・自宅の差は顕著にみられない。

「実践レベル」では下宿・自宅の差異の方が大きい「必要意識レベル」では男女差の方が大きい。自宅者が合理的知識が必要だと思っているものの、実践に結びついていないことが伺われる。また、下宿者で「あまり必要ない」と回答した人が約5%存在し、洗濯量と洗剤量を考える必要性を感じていない人もいることがうかがわれる。

3) 情報獲得能力に関する質問の分析

資料1③【情報獲得能力】に関する質問「今流行しているファッションやコーディネートについての情報収集を心がける」に対する回答の内訳について次の傾向が見られた。

資料1③に示す男女別の「実践レベル」においては、性別である男女差が著しく見られた。流行りのファッションやコーディネートの情報収集を「よくする」・「少しする」と回答した人の割合が、男子は約40%、女子が約70%と両者の間に30%の差がみられた。このことから、女子の方がファッションへの関心が高く、常に流行を取り入れようと探索していることがうかがえる。生活形態別で見ると、下宿・自宅差はあまり見られず、生活形態は影響を及ぼさないことが分かる。

「必要意識レベル」では、男女別、生活形態別ともに「とても必要」・「少し必要」と回答した人の割合が70%程度にとどまり、「必要意識レベル」があまり高くみられない。女子に関しては「実践レベル」の内訳と「必要意識レベル」の内訳があまり変化せず、「あまり必要ない」と思っている回答者もいることが分かる。生活形態別から捉えても、同様に「実践レベル」から10%ほどしか変わらず、必要だと思っ
ている人は実践し、必要だと感じていない人は実践もしていない傾向にあることが考えられる。こうしたことから、実践に積極的なグループの人は、必要意識も積極的グループ、実践に消極的なグループの人は、必要意識も消極的なグループと両者の関係が重なっていると捉えることができるのではないかと推測する。

4) 技能レベル〈1〉に関する質問の分析

技能に関する質問項目は、資料1④【技能レベル1】と、少し難しい技能を要する⑤【技能レベル2】の2つの項目から考える。

資料1④【技能レベル1】に関する質問「ボタン付け・ほころび直しなど、基本的な衣服の手入れができる」に対し、「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答し回答の内訳を図で示した。

資料1④に示すように「実践レベル」の図から、男女差が大きい傾向がみられ、下宿・自宅差はあまりみられない。簡単な衣服の手入れを「よくする」・「少しする」と回答した男子は約35%、女子は80%弱と2倍以上の差がみられた。ボタンが取れたり服が綻んだとき、女子は自分で繕うとするが男子は自分で修繕には取り組まない傾向があることが分かる。

また、「必要意識レベル」でも男女差が表れ、100%近くの女子は必要意識の面で積極的に取り組むグループであるが、一方で男子の2割は「全く必要ない」・「あまり必要ない」と考えており、服がほつれたらそのままにして着続けるか、新しいものに買い替えていることが考えられる。生活形態別のグラフから、下宿者、自宅者ともに9割程が積極的な回答をし、生活形態による差はあまり見られない。

5) 技能レベル〈2〉に関する質問の分析

資料1⑤【技能レベル2】に関する質問「Tシャツやハーフパンツなど、ミシンを用いて簡単な衣服の製作ができる」に対し、「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答し、回答の内訳を図で示した。

資料1⑤に示すように【技能レベル2】では、【技能レベル1】と顕著な違いがみられた。男女別の「実践レベル」図から、男子では約85%、女子では約75%が「全くしない」・「あまりしない」と消極的な回答をし、男女ともに「実践レベル」が低いことが分かる。生活形態別に示した図からも、下宿者、自宅者ともに8割の人が消極的な回答を示し、多くが実践に消極的なグループにあることが分かる。【技能レベル1】の「実践レベル」では約45%と顕著な男女差がみられたが、衣服の製作に関するレベルでは、女子も実践の取り組みが低く、男女差は約10%になっている。

「必要意識レベル」で見ると、男子では約50%、女子では約30%が衣服の製作をする技能は「全く必要ない」・「あまり必要ない」と考え、「必要意識レベル」も低くなっていることが分かる。生活形態別では、下宿者、自宅者ともに、約4割が消極的な回答をしている。この背景として、実生活では多くの店舗やインターネットのサイトで衣服が手軽に買えるため、自分で布を買い製作する必要性を感じなくなっていることが「必要意識レベル」の低さに影響していると考えられる。一方、過半数が「とても必要」・「少し必要」と回答し、衣服を製作するという実践には取り組んでいないものの、ミシンを扱える技能は必要だと考えていることが分かる。

全体的に、「実践レベル」、「必要意識レベル」とともに下宿・自宅差はみられなかったが、男女差はみられたことから、【技能レベル2】では性別が影響を及ぼしていることが推察できる。【技能レベル1】でも同様の傾向であったため、衣生活の〈技能〉では性別が影響を及ぼしていることが明らかになった。

(2) 『内面的項目』の分析

1) 交流に関する質問項目の分析

資料2⑥交流に関する質問「TPOを考え、社会の中での衣服の働きなどに考慮して衣服選びをする」は10項目中の【家族・地域との交流】に該当する項目である。この項目に関し「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答した内訳から、以下の傾向がみられた。

TPOを考えた衣服に関しては、「実践レベル」を見ると、男子は約75%、女子は約90%の人が「よくする」・「少しする」と回答し、実践の取り組みに積極的であることが分かる。生活形態別で見ても下宿者は9割、自宅者は8割と高い「実践レベル」であることが分かる。こうした結果から、社会の中で生きていく上で、時や場所を意識した服装をすることを大切にしながら衣服選びをしていることがうかがえる。

資料1. 衣生活の客観的項目 (5項目)

	質問内容		実践の視点	必要意識の視点
① 科学的知識	<p>衣服の素材によって、吸水性や通気性などが異なる等、科学的な知識に配慮して取り扱っている。</p> <p>■実践：全くしない 必要意識：全 ■実践：あまりしない 必要意識：あ ■実践：少しする 必要意識：少 ■実践：よくする 必要意識：少</p>	性別		
		生活実態		
② 合理的知識	<p>洗濯する時には、洗濯の汚れの落ちと、適切な洗剤量との関係について考え、無駄な洗剤を使わぬよう考慮する。</p> <p>■実践：全くしない 必要意識：全 ■実践：あまりしない 必要意識：あ ■実践：少しする 必要意識：少 ■実践：よくする 必要意識：少</p>	性別		
		生活実態		
③ 情報活用能力	<p>今流行しているファッションやコーディネートについての情報収集を心がける。</p> <p>■実践：全くしない 必要意識：全 ■実践：あまりしない 必要意識：あ ■実践：少しする 必要意識：少 ■実践：よくする 必要意識：少</p>	性別		
		生活実態		
④ 技能レベル1	<p>ボタン付け・ほころび直しなど、基本的な衣服の手入れができる。</p> <p>■実践：全くしない 必要意識：全 ■実践：あまりしない 必要意識：あ ■実践：少しする 必要意識：少 ■実践：よくする 必要意識：少</p>	性別		
		生活実態		
⑤ 技能レベル2	<p>Tシャツやハーフパンツなど、ミシンを用いて簡単な衣服の製作ができる。</p> <p>■実践：全くしない 必要意識：全 ■実践：あまりしない 必要意識：あ ■実践：少しする 必要意識：少 ■実践：よくする 必要意識：少</p>	性別		
		生活実態		

資料2. 衣生活の内面的項目（5項目）

	質問内容	実践の視点	必要意識の視点
⑥ 家族等と交流	<p>TPOを考え、社会の中での衣服の働きなどに考慮して、衣服選びをする。</p>	<p>性別</p>	<p>性別</p>
		<p>生活実態</p>	<p>生活実態</p>
⑦ 探索行動	<p>自分らしく衣服を組み合わせたたり、着方を工夫する。</p>	<p>性別</p>	<p>性別</p>
		<p>生活実態</p>	<p>生活実態</p>
⑧ 創意工夫	<p>家庭生活が楽しくなるような、オリジナル袋やウォールポケットなどを、自分のイメージをもとに計画したり作る。</p>	<p>性別</p>	<p>性別</p>
		<p>生活実態</p>	<p>生活実態</p>
⑨ ゆとり・いやし	<p>外から家に帰ると、自分が「くつろぐ」ための「気持ちよい」と感じる衣服に着替える。</p>	<p>性別</p>	<p>性別</p>
		<p>生活実態</p>	<p>生活実態</p>
⑩ 人間の五感	<p>衣服の下着やTシャツなどを選ぶとき、自分が気持ちよく着られる〈デザイン〉や〈着心地〉にこだわる。</p>	<p>性別</p>	<p>性別</p>
		<p>生活実態</p>	<p>生活実態</p>

2) 探索に関する質問項目の分析

資料2⑦探索に関する質問項目は「自分らしく衣服を組み合わせたたり、着方を工夫する」とする内容で、10項目中の【探索行動】を示したものである。この項目に関し、性別や生活実態別に「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答した内訳から、以下の傾向がみられた。

資料2⑦に示すように「実践レベル」では、積極的な回答をした男女差は約20%、下宿・自宅差は約10%と男女差の方が大きくみられた。「必要意識レベル」図からも下宿・自宅差はあまりみられず、男女差のほうが大きくみられた。女子の方が、衣服を通して自分らしさを表現しようという傾向が強いことが分かる。

3) 創造（イメージ形成）に関する質問項目の分析

資料2⑧創造（イメージ形成）に関する質問「家庭生活が楽しくなるような、オリジナル袋やウォールポケットなどを、自分のイメージをもとに計画したり作る。」項目は、10項目中の【創意工夫】に該当する質問である。この項目に関し、性別や生活実態別に「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答した内訳から、以下の傾向がみられた。

資料2⑧に示すように「実践レベル」では、「全くしない」・「あまりしない」という消極的な回答と「よくする」・「少しする」という積極的な回答の比率の男女差、下宿・自宅差が同程度で表れ、およそ10%の差がみられた。一方で消極的な回答の中で、下宿・自宅差はみられなかったが、男子は60%近く、女子は40%近くが「全くしない」と回答し、男子の方が「実践レベル」が低い傾向がみられた。オリジナル袋やウォールポケットなどの小物も衣服と同様に店舗やインターネットのサイトで手軽に購入できるため、自分で製作することがないことが伺われる。

「必要意識レベル」から見ると、過半数の人が「とても必要」・「少し必要」と積極的な回答がみられ、「実践レベル」は低い一方で、必要だという意識は50%近くあることが分かった。しかし半分近くが「全く必要ない」・「あまり必要ない」と回答しているのも確かであり、購入すればいいと考えている人も少なくはないことが伺われる。

全体的に「実践レベル」、「必要意識レベル」とともに生活形態による差はあまり見られず、性別による影響が見られた。衣服も小物も金銭を払って購入すればいいという考えがあるからか、『客観的項目』の【技能レベル2】と同様の傾向が見られた。

4) ゆとり・いやしに関する質問の分析

資料2に示すゆとり・いやしに関する質問⑨「外から家に帰ると、自分が「くつろぐ」ための「気持ちよい」と感じる衣服に着替える」項目は、10項目中の【ゆとり・いやし】の視点から捉えた項目である。この項目に関し、性別や生活実態別に「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答した内訳から、以下の傾向がみられた

資料2⑨図に示すように「実践レベル」図から、男女別、生活形態別ともに、同じような男女差、下宿・自宅差がみられたが、どちらも8割以上の方が実践に積極的なグループで、「実践レベル」が高い。一方で、男子と自宅者で「全くしない」と5%程度が回答し、帰宅後に着替える習慣がないという実態がみえてくる。

「必要意識レベル」からみると、性別、生活形態関係なく9割程が家に帰ったらくつろげる服装になる必要性を感じていることがみられる。一方で「あまり必要ない」とする回答も1割程みられ、実践しない人は、着替える必要性を感じていないと捉えることもできる。

5) 感覚（人間らしい五感）に関する質問項目の分析

資料2の〈うれしい・悲しい〉〈楽しい・苦しい〉など人間が本来持つ感覚に関する質問⑩「衣服の下着やTシャツなどを選ぶとき、自分が気持ちよく着られる〈デザイン〉や〈着心地〉にこだわる」に対し、「実践レベル」、「必要意識レベル」について4段階で回答し、図で示した。

資料2⑩【感覚（人間らしい五感）】の項目では「実践レベル」が全体的に高い傾向がみられた。男女別、生活形態別ともに、9割以上が「よくする」・「少しする」と実践に積極的なグループがみられた。

「必要意識レベル」からみても、9割以上が「とても必要」・「少し必要」と必要意識に関して積極的な回答を示し、この傾向は「実践レベル」と「必要意識レベル」においても差がみられないことが分かる。なお、衣服を選ぶ場合にデザインや着心地で選ぶことをしない人も1割弱存在し、「必要意識レベル」でも存在する。衣服選びの際は、デザインや着心地ではなく、値段など他の要素で衣服選びをすることも考えられる。

(3) 衣生活に関する課題

1) 客観的要素

客観的要素として取り上げた①【科学的知識】に関する質問「衣服の素材によって、吸水性や通気性などが異なる等、科学的な知識に配慮して取り扱っている」や②【合理的知識】に関する質問「洗濯する時には、洗濯の汚れの落ちと、適切な洗剤量との関係について考え、無駄な洗剤を使わぬよう考慮する」に関する内容は、「必要意識」に関しては9割近くが生活の中で必要な知識と位置づけているのに対して、生活の中での「実践」に積極的に取り組むのは半数近くに留まる結果がみられた。この事例のように家庭科の学習内容として必要と認識していても実践に結びつけることが難しい状況がみられる。こうした状況への対応として、学校教育の段階で知識の習得を家庭生活での実践に結びつける活動が必要と考える。家庭科の授業において、洗濯の失敗事例などを見せ、実生活での様々な状況を想定する指導事例はみられるが、さらに児童・生徒の家庭での実践報告について紹介する方法を模索する必要があるであろう。例えば掲示や家庭実践の紹介記事などであれば、授業時間外でも情報の共有は可能であろう。

また客観的要素における技術の実践に関する項目における④基礎的技術と⑤応用的技術には差異がみられ、基礎技術に関し半数程が日常生活での実践に取り組む経験があるものの、応用技術はほとんどと取り組まれない実態がみられた。この実態は、現在の衣生活は既製服を選択・購入することが日常的に行われていることを反映し、ミシンの家庭での保有も減少していることが推測できる。さらに応用技術の今後の生活の中での必要意識に関しても、基礎技術は必要とする意識が90%以上みられるものの、応用技術は半数程が必要ではないと捉えている現状がみられた。こうした現状は、応用技術を活用する場面が日常生活の中では存在していないことを示している、このことは、次に述べる内面的要素として取り上げた、日常生活の中での「創作」活動の実践が著しく低い結果と関連していると思われる。日常生活の中から「ものづくり」の場面が失われてきていることがうかがわれる。

2) 内面的要素

衣生活における内面的な要素として取り上げた質問項目は、家庭科で扱う人間らしい快適で豊かな生活の創造を具体的事例として示したものであるが、こうした豊かな生活の実現に関しては日常生活での実践も必要意識も高く、日常生活における内面的な要素の重要性を示唆する結果がみられた。

一方で、内面的な要素の創意工夫の事例として取り上げた、家庭生活の中での創作活動に関しては、他項目の傾向とは異なり、実践も必要意識も低い結果がみられた。このことは客観的要素の技術に関し、既に述べたように、習得した技術を応用して日常生活の中でモノを創造する行為が存在しなくなったことを示している。

かつては、家庭生活の場で家族の衣服を縫うこと等、生活に必要なモノを作り出すことは、必要不可欠な生活の中での活動であったが、既製服の浸透により衣服は購入するものとする概念が定着し、家庭の中での創作活動が既製服の浸透と共に消失している現状がみえてきた。家庭生活の中での創作活動は、時間的な制約もあり、今日では難しい面もあるが、生活の豊かさを求める内面的な要素の一つとして、創作活動の可能性について考えてみたい。食生活に関しては、日常生活の中での料理の工夫や菓子作り、パン焼き等、楽しみながら料理を創り出すことに関する情報が多くみられる。衣生活のモノづくりに関する情報もより積極的に発信する必要があるであろう。この際に問題となるのは、創作の土台となる基礎技術の習得であろう。手作りに関する家庭向けの本には、「簡単」「短時間」等の表現がみられるが、家庭での創作活動の限界は、ここで示される「技術」と「時間」の問題であると推測できる。

「技術」に関する問題は、基礎技術を習得する場が、主に小中学校段階であることから、学校教育の場で「技術」の基礎の習得のみならず、小学校段階で学ぶ「なみぬい」「半返しぬい」「本返しぬい」「かがりぬい」「ミシンの直線ぬい」を応用したモノづくりの可能性についても発展して学ぶことが望ましい。また小中学校段階の基礎技術を継続して習得するための、社会人向けの冊子や情報の発信が必要であろう。

「時間」に関する問題は、作品完成の見通しの時間を示した型紙等が見られるが、小物づくりに関しても、完成までの時間の見通しが実践に繋がる可能性も考えられる。このように限られた生活の中でのモノづくりの楽しみ方の可能性についても、今後の検討課題であろう。

なお、本調査は、家庭科の習得内容に関する日常生活での実践と必要意識に関して、大学生を調査対象としたが、調査対象者が家庭を運営する層になると、また異なる結果が得られることが予想される。

まとめ—家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する調査結果をもとに衣生活内容についての検討

前報告に既に記したが、本調査は、大学生を対象に家庭科の特徴でもある実生活の中での家庭科の活用実態と家庭科が生活の中でどの程度必要と感じているのか必要意識を探った。本調査は継続的に2004年から実施しているが、本報告では2020年度の調査結果の特徴を明らかにしたものである。

本調査の質問項目は、生活の中での衣食住の実践に着目し、各項目とも1科学的知識・2合理的知識・3情報獲得能力・4技能レベル・5技能レベル・6交流・7探索行動・8創意工夫・9ゆとり・いやし・10人間らしい五感の10項目について、4段階のレベルに分け実践や必用意識について回答した。1から5は客観的に判断できる内容とし、6から10は内面的な部分であり主観的に判断する内容を設定した。

本報は、家庭科の学習内容に関する必要意識と実践に関する変遷（1）の継続調査として衣生活の調査について分析したものである。前回の調査では、衣生活に関する実践や必用意識に男女差や生活経験の差が著しくみられた。その詳細について分析し、衣生活における『客観的項目』と『内面的項目』の分析を試みたものである。

その結果、衣生活に関しては、現代の衣生活の状況を反映して、衣服を選択する情報に関しての興味関心が高く、今後の衣生活では、より良い衣服を選択するための情報収集と科学的な知識の習得が実生活では必要とされていることが明らかとなった。一方で、衣生活に関する技術、技能も快適な衣生活を創造する土台になるものであり、生活技術の伝承と創造という2つの側面から、今後の衣生活でどのように生かせることができるのかを、学校教育の段階で提案する必要があると考える。

本調査結果をもとに、衣生活内容に関し、今後の検討課題として以下の4点について考えてみたい。

以下の4点については、今回の調査で実践及び必要意識に関しても低い回答となった学習内容に対してどのように取り組むかを検討したものである。

①衣生活の内容に関する実生活の課題

衣生活に関する学習内容は、ファッションなど情報に関する内容は実践や必要意識が高いが、技能に関する内容は低いなど、項目により差異が著しくみられた点の特徴である。この背景として衣生活に関する情報の影響も考えられる。衣生活に関しファッション情報は日常生活の中で溢れているが、日常の洗濯方法や衣服の手入れなどの知識に関しては興味関心をひく情報も限られる。学校教育の段階で衣生活の関する多様な課題、不要衣料の問題や洗剤の選択、ユニバーサルファッション、リ・ファッション等社会情勢と衣生活が抱える問題など、現在の生活との関連に着目して衣生活の多様な課題に興味関心を持つ試みが必要と考える。

②製作技術の生活の中での応用について

今回の調査では技能に関する実践と意識が著しく低い状況が明らかとなった。この背景として、学校教育で習得した基礎技術が日常生活の中では必要とされない現状がみえてくる。現在は家庭内にミシンを持ち活用する実態は限られていると思われる。家庭科での製作技術を習得する意義が何であるかを改めて考

える必要がある。小学生や中学生を対象とした前回の調査では、技能に関する実践や必用意識は大学生の実態調査よりも全体的に高く、小学生の必要意識が高い傾向がみられた。小学校段階では、製作において作品完成の達成感が得られた報告も多く見られる。こうしたことを考えると、小学校段階で技能を習得する時点で、この習得した技術の可能性についても考えることが必要ではないか。将来どのように活用できるのかを見通す学習内容も必要であると考えらる。

③衣生活の創造

小学校段階の学習では基礎技術の習得が土台となるが、中学校の段階では、基礎技術を応用して生活を創造する体験は必用ではないであろうか。小学校で学ぶなみぬい・本返し・半返し・かがり縫い・ボタン付け・ミシンの直線縫いができるようになると、その技術を応用して高齢者の衣服を考案、改良することも可能となる。高齢者施設との連携により中学生が衣服改良の提案をする実践やバザーで自作の小物を紹介するなど、社会活動と習得した技能を連携している活動も見られる。基礎技術を習得できたことによる自分の生活創造への可能性を小中学校段階から体験することにより考えることができるのではないかと思われる。

衣生活に関する課題について述べたが、今後もこうした課題について検討を試みていきたい。

【引用文献】

- 1) 夫馬佳代子・三浦莉笑・杉原利治「中学校の家庭科に関する実践能力と必要意識－客観的項目とあそびの観点の内的的項目を元にして－」岐阜大学教育学部研究紀報告（教育実践研究）第8巻，平成18年3月，115－126.
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭編』平成20年3月.
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』東山書房. 平成30年.

【参考文献】

- 1) 吉原崇恵編著『生活を科学し、実践する力を育てる授業づくり』開隆堂出版，平成22年.
- 2) 柳昌子，甲斐純子『家庭科教育の実践力』建帛社，平成12年.
- 3) 吉原崇恵『家庭科教材研究の発展』学術図書出版社，平成6年.
- 4) 柳昌子，中屋紀子『家庭科の授業をつくる』学術図書出版社，平成20年.
- 5) 青木幸子「家庭科の実践的教育を実現するための方法論的課題」『家庭科の21世紀プラン』日本家庭科教育学会編，家政教育社，平成9年.
- 6) 狭間和恵「生活との関連から見た家庭科の「学び」の検討－j. Deweyの「探究」と状況的認知論を手がかりとして－」日本家庭科教育学会誌，第47巻第2号，平成16年.
- 7) 田結庄順子「家庭科における学校知の転換とカリキュラム構想について」『市民が育つ家庭科』，大学家庭科研究会編，ドメス出版，平成16年.